同窓会報
千南原

第　6　号
昭和55年1月1日発行
編集・発行
藤枝市天王町1丁目7−1
静岡県立藤枝東高等学校
同窓会事務局

同窓会長に松永臻氏選任さる
副会長　宮崎・鈴木氏も

槙田倹作前同窓会長逝去（昭和五十三年七月）以来松永臻氏の会長代行で運営されて来た藤枝東高同窓会は、過日の総会で第四代同窓会長に松永臻氏を、また、新たに副会長に宮崎啓之進、鈴木一夫の両氏を満場一致で選任した。これで同窓会役員はつぎのような構成となり、今後同窓会の益々の発展を目指して活発な運営がなされることとなった。

同窓会役員
会長　松永　臻（3回）
副会長　伊村　隆恵（6回）
〃　宮崎啓之進（9回）
〃　鈴木　一夫（15回）
〃　橋本　守（17回）
〃　大石　鉄郎（26回）
会計監査　岩崎　正雄（12回）
〃　石田　哲夫（27回）

空からの藤枝東高全景

ごあいさつ

会長　松永　臻

昭和五十五年の新春を迎え謹んで御祝詞を申しあげます

私は昭和五十三年八月より会長代行をつとめてまいりましたが、昨年七月の総会において御推挙を辱うし、会長としてその重責を担うことに相成りました。

固より浅学非才の身、この大任を果たすには不敏であり、ご辞退申しあげましたが、槙田前会長が念願されてました「同窓会基金」を確立することもあり、前会長のご遺志を継承し、ただ誠惶誠恐お請け申しあげた次第であります。

従いまして、卒業生の皆様には母校が弥栄えに発展してゆくよう基金の目標額とする二、〇〇〇万円の募金を一日も早く達成できるよう絶大なるご理解ご協力を賜わりたくお願い申しあげます。

さて、東高のサッカー部が待望久しい一月の全国大会へ出場できるようになり心からお喜びを申しあげる次第であります。

県大会で優勝できたのも、選手諸君が不断の錬成に励んだことのほかに、東高の職員・生徒全員が一丸となって力強い応援をしてくれたこと、PTA・サッカー後援会・卒業生の方々から並々ならぬご協力ご激励を得たこと、また、サッカーO・B会の人たちから献身的な指導助言をいただいたことなど、唯々頭が下る思いがすると同時に、真心をこめて念願の優勝へと皆さんが尽されている姿を拝見して、東高の卒業生であってよかったと幸福感にひたると同時に、本校の伝統が連綿として存続している事を再認識する事が出来た次第であります。

近年、各地でさかんに各支部の総会とか同級会が恩師の先生方をお招きして開かれていますことは大へん喜ばしいことと思います。こうした会合は、他の社会では理解できない以心伝心のすばらしい人間関係だと思います。これは、理屈ではなく、心と心が通じ合って居ればこそと思います。東高の卒業生であるということだけで、同級生と談笑すれば、総てが忘れられ、昔の純真な青年の心にかえることができるし、これからの人生にも生甲斐を感じさせ、老年になっても同級会が生きる希望をあたえてくれると思います。索漠たる社会の中にあって、私たちの一歩一歩はささやかではありますが、しかし、この一歩こそ決してゆるがせにできない一歩であります。

卒業生の皆様、いつまでもお互いに援け合い、励まし合って進み、同窓会の発展のためご協力を重ねてお願い申しあげます。

新しい年を迎えて

学校長　三浦　孝一

同窓会員のみなさま、明けましておめでとうございます。

平素は、母校の為絶大な御支援をいただき、教職員一同、心より感謝いたしております。

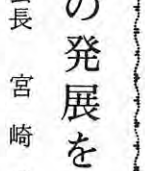
いよいよ、二十世紀も八十年代に入りました。その幕明けとしての本校の出発は、雌伏六年、先輩の築かれた輝かしいサッカー全国制覇の栄光を再現すべく、全国選手権への挑戦で始まりました。ここに至りましたのも選手の努力はもとより、千余名の在校生の声援と、加えて、苦難の時代においても、変らざる御激励をいただいた同窓生の皆様方の力強い御支援の賜と、深く感謝しております。

さて、七十年代が、経済の高度成長期から一転して、低成長期に低迷するという波乱の時代であったことを考えますと、まさに十年一昔の意味を、今更ながら痛感いたします。これからの十年は、予測し難い苦難の時代となるのではなかろうかと思います。

私ども教育にたずさわるものといたしましては、このような中で、不易と流行を弁別しながら、いつの時代にも耐えうる、そして主体的に生きていける心身ともにたくましい千南健児を育てて行きたいと努力いたしております。

一月の中旬には、国公立大学の共通一次試験が実施されます。これは昨年度より開始された試験方法であり、この成否が八割方合否を決定いたします。スポーツと同様に、勉学においても初志を達成させるべく、最後の追い込みに尽瘁いたしております。

新しい年、厳しい時代を迎えるに際し、藤枝東高あげて、「至誠一貫」の旗印の下に、清新の意気に燃えておりますので、今後の御鞭撻御協力をお願い申し上げます。



同窓会の発展を

副会長　宮崎　啓之進

同窓会の皆様、明けましておめでとうございます。昨年五月二十六日の役員会で、私が副会長に選任されたという、支部役員からの電話による連絡を受け、寝耳に水の感がいたしました。処が数日後、松永会長から直接のご要請があり、不変既定の事情を知り、お受けする事が円満な会務運営の一端と考えまして、浅学非才の身をも省みず、役員の末席を汚す事に決意いたしました。

内外共に篤い信望と、輝かしい実績を持つ松永会長の許で、経験豊かな実行力に富んだ先輩副会長諸兄のご指導をいただき、微力ながら驚馬に鞭打って、定められた職務に全力を傾注する所存であります。何卒同窓生各位の温かいご叱声とご支援を賜わりまして、この重責を恙なく果たしたく、切に念願する次第であります。

私は同窓会が現在の組織に再編成されて以来、長い間関与しておりませんので、見るもの聞くもの全てが新らしく、再出発の第一歩を踏み出したばかりで、「会の発展を」と題する事務局よりの原稿依頼にお応えする経験も資料も持ち合わせておりません。そこで同窓会基金の応募状況を拝見して感じた事を申し述べ、その責を果たさせていただきます。

金額の点は別問題として、先ず第一に、応募者数が極めて少ないこと、第二に、卒業生の多い学年が少ない学年を下廻ること、第三に、応募者比率が学年によって著しく差があることであります。勿論本部の募金要領、PRの方法等に反省すべき点もありましょうが、根本的な原因は、個々の卒業生と母校・同窓会との繋りに欠けている点があるからであります。私共志太中卒業の年輩者には、同じ町内の高校卒業生の消息について、全く判らない現状からして、数少ない役員のみによる地域的な同窓会活動には、自ら限界があろうかと思われます。

母校を遠く離れた地方の支部に於ては、親睦会が縦の繋りを密にすることが出来ますが、一般的には各学年別の横糸の繋りを強化する事が尚一層効果的であり、具体的にはクラス会を開催する事によって、会員相互の親睦を深め、情報を交換し、研鑽の場となり、校歌応援歌に母校を偲び、延いては同窓会活動への協力の資となる事は、深く信じてやみません。各回の責任者の皆様、同窓会発展のため、何卒恒例クラス会の開催を励行して下さい。

恩師のたより
終戦のころ

藤井　誠

同窓会の皆さんごきげんよう。

私が志太中にご厄介になったのは昭和十六年十月で、校長はまじめな人格者の溝口先生でじみなよい方であり、教頭は職員生徒をよく掌握していた稲葉先生であった。生徒は国防色の服で、挙手の礼、職員室へは何年何組の誰何先生に御用ですと名乗って入るのであった。大仁の女学校から来た私はびっくりして、まるで兵営にいるような気がした。反面、就任の挨拶をした夕方帰ろうと自転車を見るともう綽名らしいものを書いた紙片がついていた。綽名も言われる頃が花だろうか。お米さん、自身が古くなり、色褪せるともう言わなくなった。戦争も初めの頃は景気がよく、戦利品だといって茶色の自動車が配給され、久しく玄関の屋根下へ放置されたが、乗れるでもなくいたずらされて駄目になった頃は、近くに落ちた焼夷弾の殻が積まれるようになった。

勤労動員が来ると、私と岡部・原崎両先生の学年は、清水の日立、用宗の小柳造船へ行く事になった。日立は圧縮機と飛行機の脚を造っていて、脚のいものは型から出すと油で冷やし、X線で泡を検査した。生徒は寮へ泊り込み、広い工場内へ分れて働いた。油にまみれて旋盤をやる者もあった。食事は時々米代りの大豆がでたが、これはよく噛まないと腹はす通りであった。そして夜の蚤、時々ある空襲にも耐えた。ある夜敵の潜水艦が湾内に忍び込み艦砲で市内を射撃した。萬雷の轟くような音とともに火柱は天に冲した。

小柳では生徒は木造の浮ドックを作り、小川国夫氏は少し年長で、長身でもあり右翼に列んで同級生を指揮した。温和な彼もこの非常時、時には先生代りによくやってくれた。弟の義次氏も同学年でやゝもすれば兄の影に隠れたが、大学時代に高名な能楽師に師事して厳しい修業を積み、今では謡、仕舞、拍子のできる地方には珍しい宝生流の師範になっている。

上当間に爆弾が落ち、暗きょのたこつきなどの奉仕に行っていた二名の生徒が破片を受けた事もあった。米軍の内地上陸は学徒が防ぐのだといって、私は命を受け、藤農・島商の先生と、機銃の弾痕生々しい列車で富士の裾野に行き、見習士官から猛訓練を受けていた。

ある夜、物凄い爆弾が広島に落ちこれは普通の防空ごうでは防げないなどと噂をしあって寝た。その夜、余程刺戟を受けたのか一人の先生は、深さが三米でもだめだっちょうと、寝言をいった。あまりひどい爆撃を受けない藤枝地方の人々は、終戦の詔勅を聞いて拍子抜けの感がし、夜も明かるくなるとホッとしたが、又これから何をされるかの不安もあった。

ある日、米軍政官の一行がジープで学校へ乗りつけた。この開びゃく以来の出来事に、事務室は大あわて、老書記の一人の方は意味なく歩きまわって（逃げるとでも誤解されたのか）、米兵にステイヒヤーと怒鳴られたとは原崎先生の話であった。

新学期が来て、生徒を集めての話は、古参の先生から、町のある人はこれからアメリカから時計が入って来るから商売ができると喜んでいるが、そんな事ではいけないといった風のものであった。後で考えればこの無邪気な町の人の言った事は大いに正しかったが此の時点で、これからはそうなるのですと明かるく生徒に話せる先生は居なかったと思う。奉安殿の錠をピストルでうったとかうたないとか噂があって、奉安殿はとりこわされ、教育改革の米の大鉄槌は文字通り奉安殿に振り下ろされた。

剣道の村松先生は、竹槍の見本を作って我々に披露して下さった事もあったが米英打倒の切っ先も今は空しく、城に殉じた古武士の如く潔よく恥をひかれた。民主教育の声は澎湃として起こり、生徒には生徒会が、父兄にはPTAが、教員には組合ができた。

生徒の講堂入場の時にも先頭に立って面倒を見て下さった程に熱心であった稲葉先生は藤枝中学校長として出られ、寂しい気がした。

私はこの頃職員室に大きい火鉢が一つあるだけなので、学校側の小花板金にたのみ厚手の鉄板で、20糎と15糎くらいの筒をコの字に曲げたストーブを作らせた。これは案外調子よく一米近い棒きれだろうが不要なはきものだろうがボンボン音がして燃え、赤熱したストーブの周りに、あきの先生は集まり和気あいあいであった。この省エネの名器も四、五年務めて引退した。

これを藤井式ストーブと呼んで下さった先生もあった……。私も東高を去ってもう十一年……。なつかしい思い出はつきない。

（54年12月）